

Y20a 光害についての判断とその判断基準についてのオンラインアンケート：倫理的判断

玉澤春史（東京大学/京都市立芸術大学）、澤田幸輝（沖縄女子短期大学）、平松正顕（国立天文台）、高梨直紘（東京大学）、川越至桜（東京大学）、日下部展彦（自然科学研究機構アストロバイオロジーセンター）、杉本俊介（慶應大学）

都市化が進むにつれて夜間でも明るいまとなり天体観測のみならず住環境や生態系、交通にも影響する「光害」について、様々な環境モニタリングが実施されている。一方で公害の一つとして認識されている光害に対する感覚は個人によって様々であり、どのような判断基準によって光害の是非を判断しているかを把握することでより実効的な対策につながる。2025年2月にインターネット調査会社を利用した光害に関するオンラインアンケートを国内の2000人に対して実施した。アンケートの中では光害に関する認識のほか、具体的なシナリオに対しての是非を回答してもらうとともに、科学技術への関心や道徳基盤尺度2(Atari et al. 2023)を利用して、どのような判断基準に基づいて判断をしているかの調査を行った。環境省の定義する光害についての認知度は2割強程度であった。広告として夜空にサーチライトを照らす行為に対しての行政が規制するシナリオに対して積極的な見解を示す人は道徳基盤のうちがCare（ケア/危害）やProportionality（自由/抑圧）の重視する傾向が出る一方、衛星コンステレーションの規制についてのシナリオでは規制に積極的な人はLoyalty（忠誠/背信）やAuthority（権威/転覆）を重視する傾向が出ており、問題によって重視する道徳基盤が違ふことが示唆される。